

【第1分科会】提案（B） 「主体的・対話的で深い学び」の実現

[助言者]	広島市教育委員会	指導第二課長	土居 達司
[発表者]	広島市落合中学校	校長	川本 敏磨
[司会者]	広島市船越中学校	校長	川田 由美
[運営委員]	東広島市もみじ中学校	校長	大島 美紀
[記録者]	東広島市磯松中学校	校長	石川 憲之

1 はじめに

本校は、8つの行政区からなる広島市の北東部に位置する安佐北区の高陽ニュータウンに所在している。高陽ニュータウンは、昭和47年10月より広島県住宅供給公社により造成され、本校（広島市立落合中学校）がある高陽ニュータウンA1住区は昭和50年8月より分譲が始まった。その翌年、昭和51年4月に開校した。その後、高陽ニュータウンへの子育て世帯の入居が増加し、生徒数が激増した。マンモス校解消のため、昭和56年4月に広島市立亀崎中学校が分離開校、昭和59年4月に広島市立口田中学校が分離開校した。こうした中、時代の変化とともに、本校では生徒の問題行動が多くなり、生徒指導困難校の一つとして認識されるようになった。そこで本校では、小学校とも連携を図りながら、生徒に大切にしてほしい生活の基本である「身だしなみ」、「掃除」、「あいさつ」、「時間」の頭文字を取った「みそあじ」を合い言葉にして中学校区で指導を徹底するとともに、中学校では登下校時の「校門一礼」や、集会後の全員で一礼してからの退場など「良き習慣」が身につくなど、一定の成果が出ている。

私が本校に赴任した令和6年4月には261名の生徒が在籍していたが、令和7年4月は247名、令和8年4月は229名と生徒数は減少の一途をたどっている。

中規模校となった現在では、学力の二極化と家庭学習の定着が大きな課題となっており、令和6年度は「授業改善実践研究校（数学）」を、令和7年度は「授業改善実践研究校（家庭）」の指定を広島市教育委員会より受け、実践研究を行った。本提案は、令和7年度の研究テーマ「授業と家庭学習の環で学びを繋ぐ～継続した学びを目指して～」について報告する。

2 学校の現状と課題

本校では、平成31年度の全国学力・学習状況調査（以下、「本調査」という）における正答率の全国平均との差が国語は約8ポイント、数学は約12ポイントと、全国と比較しても学力の定着に課題が見られたことから、広島市教育委員会の研究指定を受け、授業改善に努めてきた。その結果、令和5年度では全国平均との差が国語で6ポイント、数学で6ポイントまで縮めることができた。

しかし、令和6年度では全国平均との差が国語で7ポイント、数学で10ポイントと再び大きく差がつくこととなった。全国学力・学習状況調査の結果は一進一退の状況ではあったが、自主学習ノートの提出率が大きく改善するなど、生徒の学習に対する意識は高まっており、

一定の成果は得られた。

一方で、教職員対象の学校評価アンケート（7月）では、「小テストを計画的に実施し、生徒の学習内容の定着の状況を細かく確認することができている。」の肯定率は68%であり、目標とした80%から大きくかけ離れていた。また、同アンケートで「自主学習ノートを確認して、生徒へ学習のフィードバックができている。」は65%であり、同じく目標の80%を大きく下回っている。

これらの結果から、中心となり研究を進めた教科では教員も意識的に指導に当たっているが、それ以外の教科では十分な指導ができていないという課題が浮き彫りになった。このため、令和7年度は、これまでの研究を継承した上ですそ野を広げるべく、技術・家庭科 家庭分野発信での研究を行うため、本研究指定を希望し、広島市教育委員会より指導・助言をいただきながら実践研究を進めていくこととした。

3 研究主題と設定理由

本校は「平和を愛する豊かな心をはぐくみ、自主性・社会性を持ち、たくましく生きる生徒の育成」を学校教育目標に掲げ、令和7年度より「すべての生徒が先を見通し、調整する力を身につけ、主体的に学び合う場の創造」を中期経営重点目標として学校教育活動に取り組んでいる。

本校では、生徒の学習意欲や家庭学習への取組に個人差が見られ、特に家庭学習の継続が困難な生徒に対して、どのように支援していくかが課題となっている。また、授業と家庭学習が断絶されており、「やらされる学習」になっている傾向も見られる。これらの課題を解決するためには、授業での学びを家庭学習へと繋げ、生徒自身が主体的に学び続けることができる仕組みづくりが求められる。

そこで「授業と家庭学習の環で学びを繋ぐ～継続した学びを目指して～」を研究主題として設定し、授業と家庭学習を一体的に捉え、学習のサイクルを日常化することで、生徒が自らの学びを振り返り、次の学びへとつなげる力を育成することとした。具体的には、フォーサイト手帳、振り返りシート、家庭学習ノートの3つのツールを連動させることで、「記録」「振り返り」「計画」「実践」のサイクルを構築する。これにより、学びに向かう姿勢を育て、学習習慣の定着を図るとともに、家庭学習の質の向上と授業理解の深化を目指すこととした。

4 研究推進体制

校長のリーダーシップの下、校内において研究推進リーダーを核とした研究推進チームにより、各教科の研究進捗状況も確認しながら進めた。職員会でのミニ研修や長期休業中の研修会などと連携しながら計画的に取り組んだ。

5 取組内容

(1) 全校で統一した「学習への意欲づけ」

4月当初に全教職員が「なぜ勉強するのか」について研修会を持ち、自らの言葉で生徒に語り、生徒自身が「勉強は必要だ」と思えるようなアプローチについて、教職員全体で共有した。

(2) 小テスト・課題提出の周知と管理

クラスルームで生徒に小テストや単元テストの実施や課題提出の予定を共有した上で、保護者にはメール配信で通知（下図参照）した。クラスルームの情報から、メール文に抽出する作業は自動化している。

本日の家庭学習課題（落合中/1 1/1 0）

広島市立学校連絡ポータル <lgcrm@service-now.com>

To ▼

落合中学校からのお知らせです。

本日の家庭学習課題をお知らせいたします。

【1年】

<英語>

・11/11（火）にUnit5 Part3の単語テストを実施します。（2組）

<保健体育>

女子：11月6日(木) 授業で撮影した動画をみて、アンダーハンド・オーバーハンドの自己課題を書いて提出しましょう。11月12日締切

(3) 家庭学習ノートの活用と生徒同士の評価

令和6年度までは「自主学習ノート」として取り組んだが、「自主」から「家庭」へ名称変更することで、家庭学習を意識させた。フォーサイト手帳で学習計画を立て、家庭学習ノートを活用して家庭学習を進めていく。提出数を集計して提出率の向上を目指した。

～家庭学習ノート記録表について～

【朝会】

- ・家庭学習ノートに**やった日付**、**やる目的**を必ず記入させる。
- ・各班員でノートを出し合い、やった内容を見せ合う。
- ・見せ合ったノートに1人一言（良いところもしくは改善点）を伝える。
- ・班長は記録表に、やった教科、内容に（◎とてもよい、○よい、△改善する必要がある、×やってない）を記述する。次回への課題を記述する。
- ・班員全員で評価しましょう。

小テスト等の際、いつまでに何をすべきか具体的に伝え、フォーサイト手帳に記入させた。また週に1回、班単位で取り組んだ内容や課題を記入する「家庭学習ノート記録表」を活用し、生徒同士で取組を評価し合う仕組みを構築した。さらに担任はGoogle Drive上の集計ファイルに提出状況を入力し、学校全体での可視化を図った。

(4) 振り返りシートの活用

学びを言語化し、家庭学習につながる内容を記述できる振り返りシートを活用した。

(5) めあてに正対したまとめができる授業づくり（研究授業）

タブレットで意見共有し、研究授業の成果を研究通信で全教員に共有した。

(6) 月1回の研究推進チームによる進捗確認と共有

生徒の小さな変化に気づき、研究部で共有して次の実践に生かす。また、授業観察を行った際は、メモを授業者に渡した。

(7) フォーサイト手帳の活用

学習計画や振り返りを記録し、授業と家庭学習をつなぐツールとして活用した。フォーサイト手帳の活用を通し、生徒自身が計画・振り返りを行うことで自己管理能力を身につけ、より良い生活習慣を形成できるよう指導した。

学校では、朝会での前日振り返り、授業中（小テスト連絡時）の即時記録、暮会での翌日計画と「3点の計画（起床・学習・就寝）」の記入を徹底した。

6 検証結果

(1) 成果指標と方法

- ・ 家庭学習アンケート（7・12月）・・・肯定率 80%以上目標
- ・ フォーサイト手帳活用アンケート（同上）・・・肯定率 80%以上目標
- ・ 振り返りシート活用アンケート（同上）・・・肯定率 80%以上目標
- ・ 実力テスト平均点（年間複数回）・・・平均点 45 点以上目標

(2) 結果

家庭学習ノート 		7月	12月
家庭学習ノートを使うことで、学習内容の定着に役立っている。		80%	83%
家庭学習の内容を授業で活かせていると感じることはある。		81%	87%

フォーサイト手帳 		7月	12月
フォーサイト手帳を記入することで、計画的に学習を進めることができた。		57%	53%

振り返りシート 		7月	12月
振り返りシートを書くことで、自分のできること、できないことが分かる。		73%	72%
振り返りシートに書いたことを家庭学習に活かすことができている。		60%	63%

- ・ 家庭学習への意識向上が見られ、提出率が改善した。
- ・ 振り返りの記述量・質に向上がみられた。
- ・ 計画的に学習を行う生徒が増加した。
- ・ 実力テスト平均点が上昇傾向にある。

7 取組成果と課題

本研究では、「授業と家庭学習を一体化した学習サイクルの構築」を中核に据え、フォーサイト手帳・振り返りシート・家庭学習ノートの3つのツールを連動させた実践を全校体制で推進した。その結果、生徒の学習に対する姿勢および教員の指導の在り方の双方に明確な変容が見られ、以下の成果が確認できた。

(1) 成果

① 生徒の主体的な学習態度の向上

振り返りシートや家庭学習ノートの継続活用により、生徒が自らの学習を「記録→振り返り→計画→実践」の流れで捉える習慣が形成された。

これにより、以下の変容が見られ、学習への自己調整力が高まった。

- ・ 自分で学習計画を立てる生徒の増加
- ・ 家庭学習の提出率・継続率の向上
- ・ 「やらされる学習」から「自ら取り組む学習」への意識転換

特に、振り返りにおいて「次に何をすればよいか」を具体的に記述できる生徒が増え、学習の見通しをもって取り組む姿が日常的に確認できた。

② 授業と家庭学習の接続強化

従来は分断されがちであった授業と家庭学習を、振り返りシートと家庭学習課題によって意図的に接続したことで、以下の変容が見られた。

- ・ 授業内容の復習・定着が促進
- ・ 家庭学習が授業理解の深化につながる好循環の形成
- ・ 学習内容の定着状況を確実に把握

その結果、単なる課題消化型の家庭学習から、授業と連動した意味のある家庭学習へと質的転換が図られた。

③ 教員の指導力・組織力の向上

研究推進チームを中心に、研究授業、研究通信、月1回の進捗共有を継続したことで、教職員に以下の変容が見られるようになり、個々の教員の取組から「学校全体の組織的実践」へと発展した。

- ・ 小テストによる定着確認の計画的実施
- ・ フィードバックの充実
- ・ 授業改善に関する教員間の対話の活性化
- ・ 全教科共通の指導スタイルの確立

これにより、研究が特定教科のみの取組に留まらず、学校文化として定着し始めている点は大きな成果である。

④ 学力向上への手応え

実力テスト結果や日常の学習状況から、基礎的・基本的内容の定着度が向上し、学習に粘り強く取り組む生徒が増加するなど、学力面においても改善の兆しが見られた。

学習習慣の確立が学力向上の基盤形成に寄与していることが確認できた。

(2) 課題

一方で、以下の課題も明らかとなった。

- ・ 取組の質に教員間の差があること
- ・ 振り返りが形式的になる場面が一部に見られること
- ・ 家庭学習の「量」だけでなく「質」の評価方法が十分でないこと
- ・ ICT 活用が共有段階に留まり、深化には至っていないこと

学習サイクルを真に機能させるためには、指導方法のさらなる精選と質的改善が必要である。

また、フォーサイト手帳について生徒が自由記述した内容をまとめると、次のような意見が上がった。

肯定的な意見として、学習計画の視覚化や提出物の管理、生活習慣の意識改革に役立ったという利点が挙げられた。その一方で、記入項目の多さが心理的負担になっていることや、以前のツール（自分ログ）と比較して携帯性や簡便さに欠けるといった不満も示された。全体として、手帳が自己管理能力の向上に寄与している反面、継続を困難にする運用上の課題も浮き彫りとなった。

(3) 今後の方向性

今後は、以下のとおり研究の充実を図り、「主体的に学び続ける生徒の育成」をより確かなものとしていきたい。

- ・ 優れた実践事例の共有と横展開
- ・ 振り返りの質を高めるルーブリック評価の導入
- ・ 家庭学習の質的評価と個別フィードバックの充実
- ・ ICT を活用した学習履歴の可視化
- ・ 小中連携による学習習慣の系統的指導

これらを進め、また、フォーサイト手帳は、授業で生まれた学びを家庭で生かすための道具であることも意識して継続していきたい。

本研究で構築した「授業と家庭学習を循環させる仕組み」は、他教科・他校においても再現可能な実践モデルであり、今後も継続・発展させていきたい。

8 おわりに

技術・家庭科（家庭分野）の授業改善実践研究校であったが、全教科に広げた研究を実践することができた。研究指定校にありがちな、特定の教諭だけが研究に取り組むのではなく、全教職員の取組に広げられたのは研究推進リーダーの手腕に依るところが大きい。もちろん、教職員の協力が無ければ進められない。引き続き「勉強の落合」と自ら唱えながら、いつかは地域から言ってもらえるよう実践を積みたい。